

月14～16日の3日間、東京・渋谷の東武ホテルにおいて国際円卓会議 (INTERNATIONAL ROUNDTABLE CONGRESS) が開催された。これは、記念事業企画実行委員会 (委員長・西平重喜会員) が会員からの希望を基に決定した8つの部門ごとに、外国から招聘した著名な研究者を交えて会員が円卓会議を持ち、意見交換を行う目的で行なわれた。

8つの部門は次のとおり、幅広い分野にわたった。

Session 1: Problems of Education and Research System of Statistics, Session 2: International Comparison of Productivity, Session 3: Statistical Models in Biology, Session 4: Geometrical Statistics, Session 5: Graphical Methods in Statistics, Session 6: Health Statistics in Developed and Developing Countries-Current Status and Problems, Session 7: Computational Statistics, Session 8: North-South Problems from the Demographic Viewpoint.

これらのうち人口問題と特に関係の深い Session 6 と 8 については、次のような参加者のもとに、それぞれ、活発な討議が行なわれ、有意義な会議を持った。

Session 6: K. Uemura (Division of Health Statistics, WHO), Current Use of Vital and Health Statistics and Physical Growth Statistics in Public Health Activities, Problems in the Generation and Utilization of Such Statistical Information.

Session 8: P. M. Hauser (Chicago Univ. U. S. A.), North Problems from the Demographic Viewpoint, G. Calot (Institut National d'Etudes Démographiques, France), French Population Policy and Africa, T. Kuroda (Nihon Univ.), North-South Population Problems and the Role of Japan, Y. Okazaki (Inst. Population Problems), Population Problems in Asia.

なお、この円卓会議のための予稿集 (314ページ+追加32ページ) が刊行されている。 (岡崎陽一記)

国際人口学会 (IUSSP) マニラ大会

国際人口学会 (International Union for the Scientific Study of Population) 総会が1981年12月9日から16日までフィリピンのマニラ市で開催された。今回のマニラ大会は、正式に登録した出席者約750名の参加があり、アジアで最初の大規模な人口学者の集いであった。会場は、マニラ市屈指の大通りであるロハス・ブルバードからマニラ湾に突き出たフィリピン政府の国際会議場で、その豪華さは過去の国際人口学会大会の歴史でも空前であったといえよう。大会のはじめにはフィリピン大統領フェルジナンド・マルコス大統領の臨席および演説があり、この大会のホストであるフィリピン側の大会にかけた熱意と意欲の程を窺わせた。

日本人の出席者は、現在国連機関に勤務している井上俊一・鹿野和子両氏を含み16人に上った。人口問題研究所からは、篠崎信男所長を始めとし、河野稠果、阿藤誠、広嶋清志、伊藤達也、高橋重郷、小島宏の各技官が出席し、ほかに黒田俊夫日大教授、小林和正京大教授、国立公衆衛生院の村松稔博士、加藤寿延亜細亜大教授、速見融慶大教授、市原亮平関西大教授、および谷勝英東北福祉大講師の諸先生も出席された。

会議は、開会式直後と閉会直前の2つの総会、半日ごとに3部会が同時進行の30の正式部会と、12の非公式 (Informal) 部会、2本の特別開催部会、そして大会中、大会前後を含め20本に上るサイド・ミーティングが行なわれるという、きわめて多種多彩なもので、その全部にわたって出席することは物理的に不可能であり、その全貌を刻明に報告することはできないが、筆者はたまたま本大会の組織委員の一人であって、本大会のプログラム作成に参画し多少地の理を得ているので、その観点から、ハイライトをかいつまんで報告すれば次のとおりである。

開会式直後に、今回の大会を最後に国際人口学会長をやめる Ansley J. Coale 教授の、「世界人口動向の再評価」と題した講演が行なわれた。これは、Coale 教授が過去年40年間形式人口学に果たした功績、とくに不完全なデータを使っていかに正しい人口指標 (出生率・死亡率) の計量を行なったかの研究の総決算を示されたものであ

った。また、閉会式直前に行なわれた Jean Bourgeois-Pichat 博士と Ronald Lee 教授の「ローマからマニラへの道程：30年間にいかに人口学が発達したか？」という主題でのそれぞれの講演は、現在の人口学の State of the art, すなわち発展の最前線と業績を要約したものとして、特筆するに値する。

30の正式部会、12の非公式部会、2本の特別開催部会は、それぞれ、人口学あるいは関連諸科学が扱う分野の、先進国の出生力、発展途上国の出生力、死亡、婚姻、家族形成、国内人口移動と都市化、国際人口移動、人口構造の変化、人口政策、経済と人口、人口モデル、人口統計改善のための諸技術、人口推計、不完全なデータを使っての人口指標推定の方法、人口数学、人口遺伝学と社会生物学、人口学の教授法等等についての、いずれも最前線を行く研究を網羅しており、それぞれきわめて多彩な研究成果が発表された。しかし、その中でもっとも本会の出席者の注目をあびたものは、第2週の12月14日夜開かれた特別開催部会の「中国の人口」と題したセッションであろう。これは Coale 教授を議長とし、中国の国立人口研究所の Lin Fu De 博士と Liu Zheng 博士がそれぞれ発表した報告を、米国の John Aird 氏とフランスの Roland Pressat 博士が討論したものだが、さしもの広い11号会議場は出席者で立錫の余地ない盛会で、午後5時半から8時までの予定時間は8時半になっても止むところを知らず、Kingsley Davis を初めとする国際的にも著名な学者から多くの質問・発言が続々と行なわれ、これが本大会のクライマックスであり、白眉であると思わせるものであった。Coale 教授が、この中国の人口に関するセッションの冒頭述べたように、10数名にも上る中国人口学者の参加（国連等に勤務しているのは除く）をまっけて、このような部会が開かれたことは国際人口学会の歴史上始めてであり、まさに historical なイベントであったと言えよう。

筆者自身は、とくに「先進国の低出生率をめぐっての社会文化的条件」、「低出生率国における年齢構造の変化の社会経済的含蓄」、「人口推計の評価」、「先進国における家族形成と解体のパターンの変化とその人口学的結果」等との部会にいくたの期待をもって出席したが、一つの興味は、先進国の現在の低出生率が将来どうなるか、最近反騰をし始めたといわれる西ヨーロッパの出生率の動向の真相はどうかということであった。しかし、最近みられた出生率の反騰現象も必ずしも普遍的とはいえず、多くの国で反騰後また低下し始めたという国もあり、なかなか簡単明瞭に解釈されないようである。ただ一つ言えることは、もし出生率が反騰をしていても、西ヨーロッパの人口学者のうち、このまま西欧の出生率が人口の置き換え水準に回復するとまで考える人は一人もいないということである。

日本からは、村松稔博士と国連の井上俊一博士が、公式部会の「不妊手術・中絶と出生力抑制との関連」と「人口推計と特殊推計とのインデクレーションの問題」のそれぞれのオーガナイザーを務めたほか、河野穉果が井上氏の部会に「世帯人員別と社会開発計画に留意した世帯数推計」と題する論文を要請されて提出した。また、黒田俊夫教授は、「人口移動の結果もたらされた地域における男女年齢別人口分布の歪みの影響」という部会の総括討論者の役を務められた。ほかに、阿藤誠博士は、世界出産力の分析に関する特別部会に「日本と米国の期待されなかった出生児数の比較研究」と題するペーパーを提出、部会でその要約を報告した。

次回1985年までの役員選挙が12月15日夜行なわれ、副会長（次期会長）William Brass 教授、事務総長 George Tapinos と9人の新理事を選出した。9名の理事の一人に、河野穉果がアジア代表として選出された。

（河野穉果記）